津田昇平教話　第三十九話

令和三年二月八日　朝の教話

人の身が大事か、わが身が大事か。

人もわが身もみな人。

おはようございます。令和三年二月八日をお迎えさせて頂きました。昨日のお話では、片岡次郎四郎（かたおかじろしろう）さんが、お参りの途中で気の毒なおじいさんに出会い、かわいそうだなぁという気持ちが高じて、気持ちが高じたところで着ているものを脱いで差し上げたんですね。そしてお参りをされると、金光様が「今日は結構なおかげを頂いたなぁ」と。「不幸せな者を見て、真（しん）にかわいいの心から、わが身を忘れて人を助ける、そのかわいいと思う心が神心（かみごころ）じゃ。その神心におかげがいただけるのぞ。それが信心ぞ」という有名なご理解の一つなんですけれども、そのみ教えについてお話をさせて頂きました。

わが身を忘れて人を助けよう、助けたい、助けようというふうな。そ

うですね、考えてというより、神心が発動したんでしょうね、強くね。それをまた、片岡さんは、自分の我情我欲（がじょうがよく）でその神心を止めなかった。そのまま現したんですね。それで、そのままその、人を助けようという神様の働きを受けて、ご自身もそれに合わして、見返りを求めることもなく、その時着ていた服、着物をですかね、お渡しになったということでした。それを神様も喜んで下さって、教祖様も、片岡さんに対して「あなたがまた結構なおかげを頂いたなぁ」と。神の子である人間として、本当にこう、神の子は神の子らしく振る舞ったなぁ、おかげ頂いた、何よりやったなぁとほめて下さったということでしたね。

こういう、気の毒な人を見たり、気の毒な物や、時には動植物も含め

てですけれども「かわいそう」というその心が湧(わ)いてきますね。それが物に向かったら「勿体(もったい)ないなぁ」ということになりますし、そういう心を神様はとても大切にして下さっているんですね。

昨日、終わりの方に西瓜(すいか)のお話をしましたね。また違う方が、西瓜をお供えしようと思ってというお話をしました。聴いておられない方は、聴いて頂いても結構なんですけれども、昨日そのお話をさしてもらって、出典がどこやったか、ちょっとはっきりしてなかったんです、私もね。

そうすると、老先生が後で本を持ってきて下さいまして、それが古い「御伝記金光大神(ごでんきこんこうだいじん)」でしたね。今出ている青と白のカラーの「金光大神」の、そのもう一つ前ですね。古い「御伝記金光大神」のところに書いて

ありました。教典をもう一度見て調べてみたんですけれども、やはり教典には載ってなかったですね。他でもどこかで読んだような、見たような記憶はあったんですけれども、ひとまず分かるところでは「御伝記金光大神」の中に書いてありました。

それは、国枝三五郎（くにえださんごろう）さんという、この方も直信（じきしん）のお一人でいらっしゃいますけれども、その方のエピソードだったんですね。その「御伝記金光大神」のところから、文章を読ませて頂こうと思います。ちょっと、如何（いかん）せん言葉づかいが古いところがありましてね、それをまず読ませて頂こうと思います。

「浅口郡（あさくちぐん）」浅口郡というのは、金光のあの辺りですね。「浅口郡乙島（おとしま）」乙島っていう場所があります。「国枝三五郎は、眼病が」眼の病ですね。「その入信の機縁（きえん）であった」入信のきっかけであったということです。「ある年の夏、西瓜の初穂（はつほ）」初穂というのは、初めての稲穂と書いて初穂って言うんですけれども、初なりですね。一番最初に出来たものを初穂と言いますね。まあ例えば、漁をされる方なら、今年最初に獲れたサンマとかですかね、そう、季節のもの。またお野菜であったり漁であったり、一番最初にとれたもの、お米もそうですし、一番最初に収穫があったものを初穂とよく言ったりしますわね。

そこから転じて、ちなみにですけども、御献備（おけんび）、神様にお供えする財

で、今は「奉（たてまつる）」ってことを書いてありますけれども、「お初穂」と書くこともよくありましたね。最近は少ないですけれども、昔はよくありましたし、今でもありますね。そういう封筒なんかも、売ってるところもあると思います。「お初穂」と書いていましてね、つまりそれも、例えば月々のお供えをさしてもらう一番最初の時にですね。お給料頂いたと。「神様のおかげやなぁ、ありがたいな。せめてものお礼をまず最初に」と思われた方が、昔であればお初穂そのものだったんですけれども、そこから転じて「一番最初にお供えさせてもらいます」と、一円も一銭も使わず、まず最初に神様に、ありがとうございますという心から供えるものを「お初穂」というふうに書いたりはしておりましたね。まあ戻り

ましょう。

「ある年の夏、西瓜の初穂をそなえようとて、」として、ということですね。「これをたずさえ、玉島（たましま）の、とある家でやすんでいると、親子づれの巡礼（じゅんれい）がきかかり」きかかりというのは、巡礼にばったり会ってということですね。歩いている中で、そこに、その辺りに来た時ということですね。親子連れの巡礼。お参り、どっかされてたんでしょうかね。「どこへ、ゆかれるか」と親子連れから聞かれたということですね。「『どこへ、ゆかれるか』ときくので、『大谷の金神（こんじん）さまへ、西瓜の初なりを、もってまいろうとおもう』とこたえた」三五郎さんがね。「空腹をおぼえていた

その子どもが、『わしも、金神さまになりたい』とて、なきだしたので」つまり、西瓜の初なり、初めて出来たいい西瓜をですね、大谷の金神様、神様のところに持って、お礼のお供えを持って行こうと思うと答えたら、その時に巡礼に来ていたお子さんが、お腹が空いていたんですかねえ。それで、あぁ、おいしそうな西瓜やなぁと思ったんでしょう。わしも金神様になりたいと泣き出したと。そしたら、金神様になったんやったら、その西瓜もらえるんやな、金神様ええなぁと思ったんでしょう。「『わしも、金神さまになりたい』とて、なきだしたので、三五郎は不愍(ふびん)におもい、西瓜を、その子にあたえ、空手(からて)で参ったが、」拳法の空手という字なんですけれども、元々、空手は素手という意味ですね。何も持っていな

いということです。「空手で参ったが、」教祖様のお広前(ひろまえ)にね。「さて、折角(せっかく)の供物(くもつ)がなくなったので、広前のそとでもじもじしていた」お供えさしてもらいたいと思って、お参りしたのはいいんですけれども、途中で、お腹を空かして泣いてしまった、その西瓜を見ていいなぁと言うて泣いちゃった子に与えてしまったので、もう持ってないですよね。そうすると、お参りはしたものの、手ぶらになってしまって、どうしたものかと思って、まあ、申し訳ないやら、恥ずかしいやら、そういう気持ちでお広前に入れずに、お広前の外でもじもじしていたと。「そこへ金光大神(こんこうだいじん)がたちでて」そうすると金光様が立って出て来られたということなんですね。で、こう仰った。「『国枝さん、西瓜のはつなりは、神さまが、よろ

こんでおうけとりになった』と三五郎をさとした」っていうふうにして書いてます。ここまでが一つのエピソードとして書いてましたね。もう一度だけ読んでみましょうか。

浅口郡乙島、国枝三五郎は、眼病が、その入信の機縁であった。ある年の夏、西瓜の初穂をそなえようとて、これをたずさえ、玉島の、とある家でやすんでいると、親子づれの巡礼がきかかり、

「どこへ、ゆかれるか」

ときくので、

「大谷の金神さまへ、西瓜の初なりを、もってまいろうとおもう」
とこたえた。空腹をおぼえていたその子どもが、
「わしも、金神さまになりたい」
とて、なきだしたので、三五郎は不愍におもい、西瓜を、その子にあたえ、空手で参ったが、さて折角の供物がなくなったので、広前のそとで、もじもじしていた。そこへ、金光大神がたちでて、
「国枝さん、西瓜のはつなりは、神さまが、よろこんでおうけとりになった」
と三五郎をさとした。

というご理解でしたね。

ここで、お話の中から感じるところ、思うところは、やっぱり三五郎さんもね。お腹を空かしていた巡礼ですからね、ずっと歩いて歩いて、方々巡っておられたんでしょう。子どもも疲れたりとか、喉(のど)が渇(かわ)いたりとか。西瓜ですから夏なんですよねえ。夏の暑い時ですから、そらもう、しんどかったんでしょう。おいしそうやなぁ、いいなぁと思ったんでしょうね。神様にお供えしよう、召し上がって頂こうと思って持って来たけれども、子どもが泣いて「いいなぁ、いいなぁ」と言うので、あんまりかわいそうやなぁと思って、そしてまあその子に与えて素手で戻った

という。ここで不憫(ふびん)に思った、かわいそうに思った。そしてその心のままに、それをお渡ししてしまった。本当は神様に召し上がって頂くものの西瓜を、泣いているお子さんに渡してしまった、ということですね。

そうするともう、何も持っていく物がありませんから、もう中にもよう入らん。相(あい)すまん、恥ずかしいなぁ、手ぶらで来たなんてっていう感じやったんですけども、それもそうなんですけれども、そこで、金光様のお言葉がね、ありがたいですね。

「西瓜のはつなりは、神さまが、よろこんでおうけとりになった」

実際には神様のとこに持って来てですよ、神様にお供えをするということはできなかった。しようと思ったんですよ。しようと思って持って

来られた。けれども叶わなかったんですよね。でも、気持ちは本当に神様のところに持って来られた。何もボランティアしようとしたわけじゃない。神様にお供えしようと思って、それでまあ、喜々としてお参りをされてた途中でしたものね。

でも、そこが大事なところで、神様のところに持って行きたい、神様に召し上がって頂きたい。「ありがとうございます、ここまでおかげ頂いて」ということでね。その心でお参りをしてた。でも、気の毒な様子、子どもの様子ですね。昨日の話の片岡さんは、気の毒なおじいさんでしたし、今日のお話の中ではお子さんでしたね。巡礼で疲れ切ってしまってたのかもしれません。でも、その方に差し上げて、手ぶらになったけ

れども、そしたら結局神様はとても喜ばれたし、そのお供え物も神様は喜んで受け取って下さったと。見て下さってたわけですよね。実際にお広前（ひろまえ）に持って来て、これお供えして下さいってできなかったけれども、それでも、国枝三五郎さんのその真心、お供えさしてもらいたいっていう、せずにはおれんというその真心を、神様は受け取って下さったし、さらには途中でお腹を空かしてる子にお供え物を渡すことになった、その心も神様とても喜んでくださったし、そういうエピソードですね。

この、かわいいという心でわが身を忘れて、ですけれども「これまあ、せっかくのお供え物やから、渡すわけにはいかんしなぁ」と思って、それでお参りしてお供え、これもある意味、普通だと思うんですよね。

でも、あまりにかわいそうになぁと思って、それを渡してしまったら、手ぶらになるし、手ぶらで参るいうたら、ちょっとお参りもしにくいなぁと思うところが、それもあまり後先考えずに、もうかわいそうにと思って渡してしまったと。そら、どこかに寄るところがあったら、何かそこでまた買ってお供え物ってなるのかもしれませんけれども、当時のことですから、途中でパッとということも出来なかったのかもしれませんね。

そう思ったらもう、ただただお広前の外でもじもじして、まあ外から拝んで帰らせてもらおうかぐらいに思ったんかもしれないですけれども。でも神様はちゃんと、手ぶらで来ても、それでも「ちゃんとお供えした

なぁ」と。神様ちゃんと喜んで「その心を、真心を受け取ったよ」と言って下さった。本当に救われる、ありがたいお話ですね。

お供え物を持って来られたという、その御礼(おんれい)の心で持って来られたというのも、神様もそうかそうかとニコニコとしてくれるんですけれども、でも一番は、気の毒な人を見て放っておけなかったという、その心なんでしょうね。それが一番お喜びだったんじゃないでしょうかねえ。

この、かわいそうというその心に神様が宿るということは、よく教祖様は仰っておられましたね。違うみ教えなんですけれども、近藤藤守(こんどうふじもり)先生のね、お伝えになります。これも何度か、よくお話したことがあると思いますけども、

「明石(あかし)で烏(からす)をおとりにして雀(すずめ)を捕っていました。杭(くい)を打って烏をつなぎ、その前にえさをまいて、烏がいるからと雀が安心して来たところを、かすみ網(あみ)をかけておりました。かわいそうなことをすると思いました」

という話を申しあげたら、

「かわいいと思う心が、そのまま神である。それが神である」

と仰せられた。

（理Ⅱ近藤藤守　一七）

「かわいいと思う心が、そのまま神である。それが神である」このかわいそうという言葉ですね。かわいいというのんは、いわゆる現代で言う「可愛いねえ」っていうかわいいとはまたちょっと違って、そういう意味もないわけじゃないですけども、元々はかわいそうにとか、不憫(ふびん)だなぁとか、なんとかしてあげんといかんなぁとか、守ってあげたいなぁとか、あるいは癒(いや)してあげたいなぁ、整えてあげたいなぁ、助けてあげたいなぁ、さらには、育ててあげたいなぁとかね、そういう心ですよね。そういう心を神心(かみごころ)と言い、それこそがそのまま神である、と仰ったんですね。

私達の中にも、そういう神様の心が皆あります。何に対して現れるかというたら、一つは不憫なものを見てというふうな言葉があるように、またちいちゃい可愛らしいものを見て、そういうかわいいという心、かわいそうにということから、また守ってあげたいと思うたり、助けてあげたいと思うたり、育ててあげたいという気持ちですよね。

そういう心が出てくるわけですけれど、人に対してもそうだし、今度は物に対して、物を大切にしたいなぁとか。これは神様から頂いた物やから大切に大切にさせていただかんといかんなぁ。自分のために恵んでくださった物やねんから、粗末にしちゃいかんなぁ。自分の物やない、これみんな神様のもんや、ありがとうございます、と思って大切に使わ

して頂く。あるいは、ありがたく頂く。そういう物に対するかわいいという心。

で、最後には自分に対してかわいいという心。自分を大切にさしてもらう。自分と言いましても、神様から、天から御霊（みたま）、地から肉体を分けて頂いた小天地（しょうてんち）ですから、自分の命と言いましても、神様からの授かり物だと思ったら、自分もまた神様の子ですからねえ。だから大事にさしてもらわんといかん。自分も大切。自分に対してもかわいそうにという心を、また、愛（いと）おしいという心、大切にする心、自分も育っていこうという、そういう心、その神心ですね。だから、人を大切に、物を大切に、自分を大切に、というその心を、かわいいという心と言うんですね。

人だけではない、また自分に対してもそうですね。人のことがかわいい、かわいいと思って、でもある程度のことであれば、自分の身を切っても、それでもまた意味があるんですけれども、かといって、じゃあ本当に自分が立ち行かんところまで行ってしまうと、これは、してる行為は人を助けるために、っていうのは神様の御心（みこころ）にかなうんだけれども、でも一方でそれは、自分の身を、今度はあまりにも痛めることになってしまうと。そうすると、神様としても、今度は自分の身を結果としては苦しめてしまう形になりますんで、そういう場合が、多少なりとも致し方ない時ももちろんあるんですけども、でも、立ち行かんぐらいまでやってしまうと、今度は片手落ちになっちゃいますよね。神様もその心は

喜んで下さるけれども、でも「おまえも立ち行かんようになってしまった」と、神様に新しい悩みの種を与えてしまっているようでもあります。

もちろんね、昨日今日のお話でも、寒い日に気の毒なおじいさんを見て、着ていた物をお渡しして、それだけでも、普段使っておられた、大事にされていた物を、上着をお渡しするし、自分ももちろん寒いですし、車に乗って帰るっちゅうわけにはいきませんからねえ。着る物がないままお参りをされて、そのまま、また歩いて帰る。もう寒い日でしょう。せっかくの上着を人にあげて帰ったんですから、そうするとひょっとしたら、奥さんから「あんた、あの上着どうするの。あれ結構したんやで」

と言われたら困りますよ。

今日の国枝さんも、初なり、初なりですからそれなりの値段もしますよ。まさに旬になったらね、それなりに物価も安くなるもんですけれど、でも最初に出来た時っていうのは、まだめずらしいもんですから、ちょっと値は上がりますよね。でもそれを、ようやく出来ためずらしいもんで、いいもんでと思うたから、神様にまず召し上がって頂きたいという心で持って来られた。でも手ぶらになってしまって、あちゃーと思ったんでしょうね、それでお参りするにも、敷居をまたぐことができんなぁ、えらいこっちゃと思いはったんでしょう。

でもそういうふうにして、片岡さんにしても国枝さんにしても、自分

の身を、言わば切ってですね、ある意味痛みを覚えながらでも自分のことを忘れて、人を助けたいという気持ちで動かれた。でも、それはそれでまあ、身を滅ぼすというふうなことはもちろんありませんし、痛みはないわけじゃないけれどもね、それでも立ち行く程度ではあります。今度、これが行き過ぎてしまうと、神様もちょっと心配になるでしょうね。

私は、自分自身がね、尼崎教会の百年祭の時でしたけど、ちょうど大学院に行っていた時でしたね。二回目の鬱（うつ）になったんですよね。神様のお役に立つことなんやと思いましてね、学院（金光教学院）に入る前ですよ。人様の役に立つことや、人のため、神様のため、人のためお役に

立つんやったらと思うて、ちょっと老先生は御用で、威子(たけこ)先生もちょっとね、体調悪くされて金光にいらっしゃって、たまの先生が、九十いくつやったかなくらいでおられたんですよ。もう教会に居るのはたまの先生と私しかおりませんでしたしね。

もうほとんど、私がお広前(ひろまえ)の、今で言うたら掛出(かけだし)のあの辺りに、机を出して、もうずーっと一日中、私、そこに座ってたんですよ。大学院生で勉強したかったんですよね。ちなみに「宗教と教育」ということについて勉強していましたけれど、それを勉強しようと思っても、お参りの方が来られて、別に教師でもないからお結界(けっかい)にも座れんし、たまの先生は出て来ることもできない。まあ、腰の事情もあり。で、私がずっと、

ちょっと対応させてもらったりということではあるんですけれど。でもね、まあ、一日二日くらいやったらええですけどね。もうどこにも、外にも出れんような感じになりましてね。おってもらわんと困ると言われまして。教会ですから、朝から晩までずっと開け放しにされてます。そん中で、もう九十いくつのおばあさんになる、たまの先生一人でというわけにもいきません。なので、私がずーっとお広前に、朝から晩までね、居させてもらうというのも、ご飯食べるのもなんか落ち着かんしなぁと思って、そんな状態でずっと居さしてもらって。

それでもその上で、百年祭が、尼崎教会のこのお広前ではちょっと手狭ということでね。「アルカイックホール・オクト」というところで、何

百人か、千人くらい入るんかな、そこでさしてもらったんです。その準備やらなんやらで、私も中心的にずっとやらしてもらいましてね。ほんでもう、神様のためやから、人のためやからと思って一生懸命やったら、最後はもう血尿まで出てきましてね。もう寝ることもできませんでしたしね、精神的にもだいぶストレスがたまって。もう終わる頃には鬱になってましたね。また死にたいやら何やらなってましたよ。

で、もう私としてはね、これまで助けて頂いたから、神様へのお礼と思って、神様のため、また人のため、お役に立てるんやったらと思って、自分の身をお使い下さいと思って、一生懸命、自分なりにやったんです。でも、結果としてはどうなったかというと、また鬱になってね、大学院

も休学する形になったわけですよね。

死にたいやら何やらってなりましたし、なんで神様こんなことになんのんよという気持ちもずっとありましたしね。毎日こう泣いたりしておりましたね、あん時は苦しくて。でも、結果として気付かして頂いたのは、お広前で神様に向かっていく中で気付かせてもらったのは、私の、人を助けたい、神様のお役に立たせてもらいたいという、その心は尊かったと思うんですよ。神様喜んでくださった。でも自分の身を、こう、痛めてしまって、まあ、痛め過ぎてしまったんでしょうね。そのわが身を忘れたのは忘れてやってたんです。けれども、まあやり過ぎてしまって、終わってみたら、もう自分が立ち行かんようにまでなってしまって

たというところで、神様も心は喜んで下さったけれども、でも、私のこのやり方では片手落ちで、神様としても喜んであげたいけれども「お前の様子見たら、はぁぁ…」という気持ちで悲しんでおられるんだろうなぁ、ご心配おかけしてるんやろうなぁという、その気持ちにならせてもらいましたね。

人の身が大事か、わが身が大事か。
人もわが身もみな人。

（理Ⅲ神訓　二・三三）

という教えがある。「人の身が大事か、わが身が大事か。人もわが身もみな人」である。どっちも人であって、神様にとったら大事なかわいい氏子なんですね。

でも、人の身が大事かわが身が大事か、という時に、私はもう人のことばっかりでしたね。「みな人である」「人もわが身もみな人である」なんですけれども、私の場合はこう「人」っていうのは「他人」と書いて「ひと」って、まあ言うたら当て字で読む時ありますね。他の人は「人」なんですけど、自分のことはって言うたら、すっかり抜け落ちてたんですよね。だから自分のことを思いやるということは、まあ本当にね、なかったと思いますね。一生懸命ではあったんですけれども。

ほんで神様に喜んで頂ける、百年祭という、本当にもうこういうタイミングしかないし、でも老先生は御本部で御用されてるし、威子先生は、肝臓の病かなんかで体も起こせないぐらいになったんで、金光で一緒に療養される。あとはもう、九十いくつのたまの先生がおられる。信者さんは皆さん参って来られる。自分もやらんといかんことがその時は多々あったけれども、まあできないけれどもと思って。それ以外にもね、準備やら何やら色々ありました。

そんなことを一生懸命、自分なりにやらしてもらって、でもその心はええけれど、自分の身を、まあ言うたら痛めてしまう結果となってしまった。これは、周りの方、まあそれこそ「かわいい」という、周りの方

を大事にしたいという、その気持ちですよね。その気持ちで自分の身を使うて頂いたんですけれども、結果としたら、わが身までちょっと痛める形になって、鬱までなってしまう。

今思うたらね、人の身もわが身もみな人で、もう少し神様にお任せをして。「自分が」って肩にずいぶん力が入ってたんですよ。一生懸命になっちゃいますんで、私もね。でも、もう少し。今思ったらですよ。その時なりの精一杯なんで、今更言うてもしゃあないんですけど。でも、今から思うたらもう少し、我が計らい、我が力でって、あんまりこう力まんと、神様にお任せをしながら、もうちょっと神様のお力を頂いて、そして、手を抜くって言うても、まあ何にもしないわけじゃないんですけ

れどもね、神様にお力添えを頂いて、お任せをして、さしてもらってたらちょっと違ったんやろなぁと、そら思います。今やったらまた違う通り方ができたと思うんですけれども、まあ、あん時なりの精一杯ですわね。至らんかったっちゅうたら、至らんかったんですけれども、そん時なりの一生懸命でした。だからこそ、足りんながらでも一生懸命を受けて下さって、そこでまた神様がお気付け下さったんですから、ありがたいことでした。

それがあるから、今、私もこうして命を長らえて、御用に使うて頂いております。でなかったらね、私もほんまにね、なんとかせんといかんと思ったら、わが身を忘れてやんのはええんですけどね、もうそのまま

突っ走ってしまって、戻って来れんようなってしまってねえ。もう、すぐ死んでまいますよね、私なんてね。あんまり後先考えてないですよね。

そやけど、それやってしまったら今度、神様困ってしまうし、さらには氏子も困りますわね。私、急に亡くなったら困る人もそら、中にはいますんでね。そう思ったら、わが身も大事とは言うて、本当にその時はね、わが身のことなんて忘れて人を助けようと、そらします。今でもそうなんですよ。

そやけども、完全に本当に忘れて、神様と自分との繋がりまでプチンと切って助けようとしてしまったら、じゃあ私が立ち行かんように、本当にそれこそ死んでしまったらね、助けたいと思ってる人まで、結局助

けられなくなっちゃうんですよね。私も、命を繋いで頂いて、お守り頂かんかったら、助けられるものも、助けられないということは、当たり前なんですけど、分かるわけです。

つまり長丁場（ながちょうば）なんですよね、人助けっていうのは。一回パッとやったらすぐに終わるっていうわけやなくて、本当にもう、三年、五年、十年という長い単位で、手間暇（てまひま）をかけさしてもらいながら、神様が人を助けるそのお手伝いをさせてもらわんといかんのんで。そう思ったら、こん時だけっちゅうわけにはいかんのですよね。だから、そういう意味では、本当にこう、細く長く、人を助けるということ、その身に置いて頂かんと、あんまりこう、上手くいかんかったんやなぁと、今になったら思う

わけですね。

ですんで、かといって、またあっちにこっちに行きますけど、私が自分のことばっかり考えて、自分の身が大事大事って言い過ぎてですよ、人のことを結局助けれんかったら、これもいけませんし、できませんしね。やっぱりもう、火中の栗を拾う、こういう形でしか人を助けるっていうことはできないんですよ。対岸の火事っちゅうわけにはいかんのです。そこに飛び込んでいくしかねえ、助けようがないんですよね、実際には。だから、きれいずくにはいかんのですよね。きれいずくでない、人を助けようというその気持ちで、本当にしようと思ったらきれいずくではいかんのです。

「きれいずくでないのは神と医者である」という教えがあるんですけどね。お医者さんって、手術する時、お腹切って手ぇ突っ込みますでしょ。そしたら血みどろになりますわね。実際に自分が傷ついてるわけではないですけどね、お腹を切って、お腹ん中に手を入れたりとかしたら、そりゃもう、血はいっぱい付きますわね。でも、自分自身が実際に痛いというわけではない。

せやけども、人を助けようとなってきたらね、目には見えないけれども、その人のめぐりのところやら、それで苦しんでいるところやらに、もうどっぷり入りますし、さらにはこちらも傷つくことの方がほとんどですしね。それでも、この人に助かってもらいたいなぁいう心で三年、

五年、十年、二十年ってかけながら、その人を助けようと思うたら、そら、一時(いっとき)だけのことだけやったら、これで助かるというんやったら、まあどないでもありようがあるかもしれん。そやけど長丁場ですからね。だから、きれいずくにはいかんし、手間暇もかかるし。うーん。だからね、本当にこう、かわいいという心、かわいそうやな、なんとかしたげたいなぁいう心を神様が喜んで下さるから、そこは大事にせんといかん。信心あるもんとして、おかげを頂いたもんとしてね、自分さえ良かったらそれでええっちゅうわけにはいきません。

いいものは人に伝えて、悪いのは自分のところでくい止めていかんといかん。でも、かといって、人もわが身もみな人ですから、神様に十全(じゅうぜん)

に、しっかりとお使い頂くためにも、自分の身もある程度確保しながら、神様と自分と、しっかりと、こう命綱を持っときながらね、そん中で、深いところに落ちている氏子（うじこ）んところまで潜って、その氏子を、まあ言うたら、からまってるものを切って切って、そして上に連れてってあげんといかん。でも、一回の潜水で全部やろうと思ってもそんな簡単じゃないですから、一回やってまた上に上がって、呼吸整えて、また一回やって、それをやるしかしょうがない。それを繰り返して何年も何年もね、苦しんでいる氏子を助けようと思ったら、もうそうするしかありませんわね。手間、暇も、時間もかかる。

けれども、氏子もまた助かるためにも、私は私で助けたいというその

心の方も、神心（かみごころ）を現す方も、お守りを頂くということがやっぱり大事やなぁ。人もわが身も人で、そこは大事にさしてもらいたい。でも、自分のことばっかり考えて、かわいいと思う心を止めてしまったりすると、これも神様の邪魔をしますよね。神様は人を使いとなさると仰るんですから、神様は使うて下さる。神様が自分を使うて下さる。神に使われることを楽しみに信心せよって言うて下さってるんですから、自分の中にある神心が出て、助けてあげたいいうその心、その心でわが身を忘れてっていう、そこは大切にさしてもらいたいなぁって思いますね。

私はまあ、教師やからこんなことしてるんじゃなくてね。教師であるとかないとか関係ないです。私、教師やからここに座ってるんとちゃい

ますからね。教師であるとかないとかじゃなくて、一人の人間として、おかげを頂いた者として、不憫（ふびん）な人を見てなんとかしてあげたいなぁと思って、ただ善意でやっとるだけで、職業でやってるわけじゃない。職業でやってたらこんなバカバカしいもんはないと思いますよ。でも、ただ、善意でやっとるだけでね。その善意で、助かってもらいたいなぁ、できることはさしてもらいたいなぁと思って、ただ善意でやらしてもらいます。それをまあ、人が助かるところで、あぁよかったねえっていうふうにして、一緒に喜ばせてもらったらありがたいわけです。

と言っても、善意を搾取（さくしゅ）されるのはね、イラッときますけどね。そらそうですわね、命削ってやっとるんですからね。感謝も何もない。当た

り前やない。「人を助けたんやったらよかったねえ、ふうん」って、それはちょっとおかしいですわねえ、ほんとや。うん。

まあやっぱり、助けて頂いている立場の、氏子の立場で考えたら、こうして神様が人を助けようというそのお働きを、一人の人間として現して下さる金光大神様のお働きに対して、死んだと思うて欲を放して、痛い辛いところがあっても、自分たちのために助けて下さろうとしている、それは「本当にありがとうございます。神様を現して下さってありがとうございます」でないと、ほんとはやっぱりおかしいですよね。それがほんとやなぁと思います。人を助けたいというその神心について、今日もまた、昨日に続いてお話をさしてもらいました。

そのような神様の御心（みこころ）、また私達を助けたいという神様の御心、さらにはそれを、生きた人間が現してくださる、金光大神様のお働きのおかげを頂いて信心の稽古（けいこ）をさしてもろうて、神様のおかげを頂ける器作りを日（にち）にちさせて頂いているというのは、本当に私達はありがたいご縁を頂いてるものやなぁと思います。

おかげの頂き方も、教えて頂いているわけですから、また、それぞれに教えて頂いたみ教え、年頭のみ教え、お取次の中で頂いたご理解ももちろん含めて、自分自身の心に当てはめて、お稽古さしてもらって、少しでもおかげを頂ける器作りをさして頂いて、おかげを落とすようなこ

とがないように、せっかく頂いたおかげを落とさんように。おかげがないんじゃなくて、おかげ落としているだけですからね。信心せずに頂いてない、そらおかげ頂いてないです。でも頂いたおかげを落としてしまうのは、それ、自分が落として手元にないだけであってね。おかげがないんじゃないんです。ただ自分が落としただけなんです。そないならんように、しっかりと信心の稽古をして、器をしっかり持っときたいもんですね。

おかげ授けるのもね、大変なんですからね。そうですよ。授けたいから先生もやってるんでしょなんてね、んなあほかっちゅうねん。やってみいと思いますよ、そらねえ。どんだけ命削っておかげを授けることに

なっとるんやと思いますけどね。まあ言うても分からんでしょうけど。死んだと思うて欲を放してっていう、その心でさしてもらわんかったら、とてもできません。まあ、今はそれで、あの、昔はもうちょっとね、もう、なんやこの全然分かっとらんな、と思って腹立ってましたが、今はそんなもんないですけど、特には。

でもやっぱり自分の身というのを少し置いてもね、神様がお働き下さってる、金光大神様がお働き下さってるって、これほんまにありがたいことやなぁと思いますよ。自分のことというのはちょっと置いてですよ、本当に思いますよ。それがあっておかげを頂いてるのになぁ、自分のことやのになぁ、と思いますもんね。自分がおかげ頂いて、自分のことや

のに、それがよう分からんというのんは、まあ本当にかわいそうなこっちゃ。かわいそうなことやし、お恥ずかしいっちゃお恥ずかしいことやなぁと思いますね。

一体全体、自分の心が、今もし鏡に映るんであれば、どんな姿が映るんですかね。きれいな心が、ちゃんと鏡に映ったらいいですね。神様はちゃんとそれをね、合わせ鏡のようなもんで全部見えてると仰ってます。そういうご理解たくさんありますんでね。神様に嘘(うそ)はできませんのんで。だからこそ実意丁寧真一心(じついていねいまこといっしん)で、それが要(かなめ)ですから。それでもって、自分の本心の玉を磨(みが)かせて頂きたいもんですね。

まあ、どうぞ今日も一日、信心のお稽古をさせて頂きましょう。よく

お参りでした。

（了）

津田昇平教話　第三十九話

令和三年二月八日　朝の教話

発行日　令和三年六月四日

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

落丁本・乱丁本はお取り替え致します。